



杉本淑彦教授

文学研究科 20世紀学専修

“現代”を考える 学問

20世紀学とは どんな学問ですか？

20世紀学っていうのは僕の知るかぎり全世界でこの学部にはしかないですね。学問分野としては未熟ですし、どんな学問か一言で言うことはできない。じゃあ何かというと、境界領域を勉強するところだと思っています。たとえば現代思想と古典の接点。社会学と歴史学の接点。僕も歴史学とフランス文学の接点、というように。ここの文学部というのは伝統的な人文科学の領域は全て揃っているけど境界領域が不十分だった。だから10年前にこの20世紀学を作ろうということになりました。

京大には既存の立派な学問分野がちゃんとあるから学生たちにはどんどん取り組んでほしい。ただし、ひとつの分野だけではなくて、2つ、3つくらいの複数のものを学んでほしいと指導している。それでこうして学んだものを土台にして、新しい切り口の事柄に取り組んだらいいんじゃないかと言ってるんです。

新しく現代に誕生した現象のひとつとして漫画、アニメ、映画などがありまして、それらも研究対象になります。僕はその専門の研究者ではありませんが、コーディネーターとしてその研究に関わっ

ていこうと思ってます。

映像や漫画・アニメは現代を考える上で不可欠なものですからその研究がないというのはまずいと思う。考えてみてください、文学研究というのは立派な学問分野ですが、成立したのは19世紀なんです。なぜ19世紀かといえばまず小説として今の私たちが読んで違和感がないものが成立したからです、近代小説ですね。第二にそういう時代に批評としての文学研究がたくさん出たからです。つまり作品と、それを研究する人が両輪となって文化というものは進んでいくと思うんです。文学作品と、それを研究する人、その2つが揃って文学というのが文化になっていった。それと同じで、映像や漫画やアニメというのも、良質な研究がさらに漫画・アニメの文化を発展させていくと思っています。

20世紀学ではまた今までの文学部とは違う取り組みをしたいと思っています。たとえば4月はNHKの女性アナウンサーに講義のゲストとして来ていただきました。編集の問題や、女性が働くことについてどういう意味があるのかなどを知ってほしかった。ほかにも高校用の世界史の教科書を作る演習など。こういうことをどんどんしていきたいと思っています。

歴史と現代との 接点・記憶

僕はフランス史を中心に研究していますが、いま歴史学で記憶というのが注目されています。

たとえば日中関係。戦争の記憶をめぐる中国人と日本人とずいぶん差があるわけですよ。記憶というのが現実の社会に大きな影響を及ぼしてきた。フランスでは、エジプト遠征に関する記憶。簡単に言えばエジプト遠征はフランスの侵略であるわけです。だけどフランス人はあれを侵略戦争と思っていない節がある。エジプト遠征でどんなものを記憶していますか？ ロゼッタストーンの見聞だよ。日本人だけの記憶じゃなくてフランス人もそう思ってる。そこからは5万人戦争しに行ったということが抜け落ちてる。ごく一部の日本人が先の戦争を日本の侵略戦争と考えていないように、フランス人の一部はエジプト遠征を侵略戦争として記憶していない。そのことがフランスとアラブとの関係に影響を及ぼしていると思う。そういうコンテキストで歴史事実と記憶の関係を捉えていってます。

僕の研究というのは、今の現実、今の日本社会に関心があるんです。それを考える糸口にフランスがあります。

はみだし
すてーじ

まだまだはみ出し方が足りん！ 次は表紙だ！
⇒表紙担当にそのように伝えておきます。

(経・1 冬峰)

フランスでの 体験

僕は歴史学を中心にやっているんだけど、その研究動機は昔への関心というより現代への関心に端を発しています。

僕は京都の出身で、保守対革新まっ盛りの時代の蛭川革新府政の元で育ちました。これはもともと社会党と共産党が協調して支えていたものなのですが、やがて反目が起こってきた。そういうものを僕は高校生として目のあたりにしてきて、結果、社会党と共産党がファシズムと対抗してやがて対立するフランス人民戦線を卒業論文に取り上げました。

その後も、やはり社会党・共産党のことを勉強をしようと思ってフランスへ留学したんですが、ところがそのときの留学で衝撃だったことに遭うんです。

1980年代の初めごろです。僕が暮らしたマルセイユはたくさんのアラブ人と黒人がいました。地中海はさんで南側がアフリカだから当たり前だったわけですがね。でも実はそのときの日本人はフランスを白人の男女が住んでる国としてしか思ってなかったんですよ。なぜかというテレビや映画でそういう人たちがばかり映してきたから。たいていアラン・ドロンとかそういう人達の世界だったんです。みなさんしかしアラン・ドロンとかわかる？ わからんか。ほかに、ブラ

ックアフリカ、カリブ海などからマルセイユ経由でフランスに入ってくる移民労働者はたくさんいる。1960年代に高度経済成長を遂げた日本が労働力を農村に求めたのと同じように、フランスは海外に労働力を求めた。フランス語をしゃべれる植民地の国に。石油ショック以降の不況に入るとアラブ人や黒人の労働者が現地の人の職を奪うことになり、人種差別的な問題が深刻になる。僕が留学したのはちょうどそれが盛んになる頃。白人によるアラブ人殺害とかのニュースがよく報道された。僕は日常的に黒人と接触するからどうしても意識した。

で、これらのアラブ人黒人はみなフランスが植民地にした土地の人々でした。僕にとってはショッキングなことでした。ああフランスっていうのは白人だけの世界ではないんだって。フランス研究者であつたにもかかわらずそのことに気づいていなかった。それでだいぶ研究の方向変化があった。それでフランスの植民地主義の研究に入っていった。それが帝国主義の研究につながっていきます。

帝国主義の本で初めに書いたものはジュール・ベルヌの小説に絡んでいるものです。彼の作品は世界を舞台にした小説、すなわちフランスの植民地が舞台になっているわけですよ。彼の作品をダシにしてフランス人が植民地をどう見ていたのかを書いたわけです。



京大生への メッセージ

何が常識かはしっかり学んでください。たしかに僕は常識は破ってもらいたいと思っています。くだらない常識なら蹴って、既存の学問のディシプリンを越えて新しい学問を開拓してほしいとも思っています。しかし現時点での常識が何かということは知っていてほしい。常識を破るためには何が常識か知ってなきゃダメでしょ。

たとえば京大生はしつけがなってない。混んでいる食堂で荷物を机の上に置くという振る舞いは目に余る。僕は教師だから、ただ教えたらいいものとは思ってなくて、常識も身につけさせて卒業させたいと思ってます。なぜこういった行動が問題かというのを、そういう行動をして何の疑問に思わないってことは、現代の社会についての認識が希薄なんです。現代の社会について考えるにしては、それが足りない。

何が常識かどうかを踏まえて、常識に従うべき時は従い、くだらないと思ったら蹴ればいい。そういうふうな常識を破ってほしいと思います。

—ありがとうございました。

profile

- 1979年 京都大学文学部現代史学専攻卒業
- 1981年 同大学院文学研究科現代史学専攻修士課程修了
- 1984年 同大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学
- 1985年 同大学文学部現代史学教室助手に採用
- 1989年 静岡大学教養部助教授（西洋史担当）
- 1995年 同大学情報学部助教授に配置換え
- 1998年 大阪大学文学部助教授（世界史講座）
- 2002年 京都大学大学院文学研究科教授（20世紀学専修）
現在に到る。フランスの文化研究、現代文化の研究と指導し、20世紀学唯一の教授として活躍中。

作品と研究が両輪となって

“文化”は進んでいく

はみだし
すてーじ

僕は真面目なよい子だからはみ出したりなんかしないよ。
⇒残念だがこれが現実です。

(工・2 コベルくん)